

『青森県史 通史編3 近現代 民俗』（近現代）

竹永 三男

はじめに―構成・体裁・形式上の特徴

一九九六年に着手して以来二二年、本巻（通史編3 近現代 民俗）で『青森県史』が完結した。本巻は、六、二〇一ページ、基礎とした史料四、二四二点に及ぶ「近現代資料編」全八巻（二〇〇二～一七年。各巻々頭の口絵は全五七五点）、南部・下北・津軽それぞれの「民俗編資料」全三巻（二〇〇一～一四年）を基礎として叙述されたもので、「通史編近現代」が六章六二四ページ、「民俗総論」が三章一七八ページ（付録DVD添付）の大冊である。本書は、右の資料編所収史料を典拠として指示・引用し、他の章・節の叙述との関連付けを適宜おこなうことで、通史編全体の叙述の統一を図っている。また、本文にカラー印刷の写真・図表を多数掲載して親しみやすいように工夫して編集されている。

ここでは、筆者の専門範囲である通史編近現代に限って紹介、検討する。但し、この大冊の内容紹介はできないので、その構成を【表1】にまとめた。通史編各章は、それぞれ五～六節で構成されているが、各節が順に政治・経済・教育・文化等と対応しているわけではない。そこで【表1】では、内容を「政治と行政」「戦争と地域・人々」「産業と経済」「都市と交通」「教育と文化」に分け、後述の編集方針に即して「東北と青森」を加えて各節・項・小見出しをこの六つに分類して配置した。こ

の中、各章第一節は、概ね「政治と行政」に対応しており、青森県の近現代史を六期に時期区分して通史的に叙述する役割を果たしている。その時期区分から見れば、「先人たちによる歴史叙述が薄い分野を補うため」に「現代史に厚い叙述をおこなった」（小岩信竹氏「『青森県史通史編3』「近現代」刊行のねらい」）とされているように、六章中の三章三一八ページを戦後に充てていることも本巻の特徴である。ただ、そのため、資料編八巻中の六巻分に収録された戦前期の史料が膨大であるだけに、本巻では戦前期の叙述が窮屈になったように思えるが、読者は、資料編各巻に配された、それ自体が歴史叙述としても読めるような「総説」と各章・節ごとの解説を参照することで、青森県近現代史の理解を深めることができると思う。

一 「北方世界」の中の青森県近現代史

―「東北の特殊性」「後進性」とそれへの対応

青森地域の歴史を考える際の鍵の一つは、長谷川成一氏が『青森県史通史編3』の刊行にあたって「述べている編集方針、即ち、青森県の「歴史を北方世界のなかに積極的に位置づけ、従来の『みちのく』に対する認識の変革を図る」ということであろう。但し、前近代と異なつて近現代では、強力な中央集権国家が成立してその地方統轄・支配が行われ、社会資本が先ずは特定地域に偏在・集中して投資されるとともに、資本主義の形成・確立の中で、全国の各地域が程度の差はあれ、商品市場・資本市場・労働力市場の全てにわたって再編・統合されるため、地

域は資本主義経済に包摂・従属させられて、その自律的展開は格段に困難になる。その結果、「表日本」「裏日本」の格差に代表される地域格差が成立・拡大するとともに（阿部恒久一九九七年）、東北六県も否応なくその中に巻き込まれて格差づけられる。そして、このような中で、地域の「自画像」と「他者像」としてのさまざまな「青森論」が語られるのである（河西英通氏「総説『青森論』のために」「近現代資料編7 青森論」）。

この自律と包摂・従属の具体的様相を、本巻は各章・節で叙述しているが、それを青森県近現代史に固有の問題として集中的に論じていると評者が読み取ったのが、【表1】の「東北と青森」の列に書き込んだ各章の節・項目である。その中、地域の自律的展開とその条件の獲得のための取り組みとしては、津軽・南部という地域的相違をもちつつ展開する自由民権運動、馬産地としての特性に基づく軍馬生産、国有林払い下げ運動などがあるが、とくに自然環境・地理的条件に働きかけ、在来の歴史的活動の蓄積を継承・発展させて展開したりのご栽培とりんご産業が全巻を通して詳述されている。

一方、地域格差と包摂・従属という点では、「後進性」という現状認識・自己規定とその上に立つ「後進性の打破」という問題が注目される。但し、戦前では「遅れた東北」というイメージの形成はあっても（二四二ページ）、東北の特異性は、「明治三陸大津波」（一三五ページ）、「大正二年大凶作」とヤマセ（第二章第三節）、「昭和三陸大津波」（二〇七〜二〇八ページ）、一九三一年の「大冷害」（二四二ページ）など相次ぐ自然災害の要因が大きい。そのため、「東北の特殊性」は「天恵薄きこ

と」が第一に挙げられ、政治上の格差付けがそれを改善せず、助長していると捉えられている（竹永三男二〇一八年）。

これに対して、本巻によれば、一九六三年の竹内知事の開発行政のローガンで「後進性の打破」が掲げられ（四一七ページ）、一九七二年の第三次長期計画には「首都圏から遠く離れている立地条件こそが青森県の経済・文化の立ち遅れの原因である」という『後進県』の自意識が示されていた（五四二ページ）など、保守県政の開発行政の問題意識の根幹に「後進県」という地域認識が据えられている。一方でこの県行政のこのような地域認識と、他方での、降雪とヤマセ、官民有区分による国有林の拡大に起因する林野利用の制限・排除など厳しい自然条件・行政的要因の中で、「貧しい暮らしを送る村民が多かった」ことが、「戦後の高度経済成長期に入り、むつ小川原開発の受け入れにあたって、村民が最終的に開発を受け入れる素地になった」（二三四ページ）とされることは、行政の在り方と住民の主体性の問題の関係を、歴史の事実に即して示した重要な指摘である。但し、このような「後進性」という認識は島根県でも見られるように（内藤正中一九八二年）、格差づけられた地域に共通するものであり、全国的なものであることに留意する必要がある。

そのような青森県・東北六県の抱える困難を克服するための試みとして本巻では、戦前の東北振興事業、戦後の政府の総合開発計画・原子力政策とこれに対応した青森県行政の動向が叙述されている。このことについて、本巻が、「むつ製鉄」「フジ製糖」の挫折をとりあげて「政府の開発政策転換に地元が翻弄され、多大な被害をこうむった出来事」と記

⑥ = 節、1-1-1 = 第一章第一節第一項であることを示す。* = 小見出し)

産業と経済	都市と交通	教育と文化
<p>②地租改正と勸業政策 1-2-1 地租改正 1-2-2 勸業政策と士族授産 1-2-3 勸業と諸産業</p> <p>④地主と豪商の時代 1-4-1 稲作農業の発達 1-4-2 地主小作関係の拡大 1-4-3 商業・金融の発達</p>	<p>1-4-1 * 陸運・海運の発達</p>	<p>⑤キリスト教思想と教育 1-5-1 東奥義塾 1-5-2 士族とキリスト教 1-5-3 近代教育の開始</p>
<p>③相次ぐ凶作と東北振興 2-3-1 「大正二年大凶作」 2-3-2 ヤマセと国有林とトラホーム 2-3-3 東北振興と青森県</p> <p>⑤地域資源の開発 2-5-1 りんご栽培の拡大 2-5-2 国有林開発と森林鉄道 2-5-3 海洋資源と水産業</p>	<p>④都市機能の形成と課題 2-4-1 青森・弘前の市制施行 2-4-2 八戸の発展と捕鯨会社襲撃事件 2-4-3 鉄道建設と連絡線の就航</p>	<p>⑥教育制度の整備と矛盾 2-6-1 義務教育の確立 2-6-2 就学率の向上と中・高等教育の充実 2-6-3 社会教育行政の成立と発展</p>
<p>②戦時に向かう経済 3-2-1 昭和恐慌期の経済 3-2-2 三本木原国営開墾 3-2-3 りんご加工・あおもり缶詰の発展 3-2-4 戦時経済統制</p> <p>③移動する人々 3-3-1 漁業出稼ぎ 3-3-2 農村の窮乏と身売り 3-3-3 満州移民と青少年義勇軍 3-3-4 満州林業移民と営林実務実習生</p>	<p>④都市構造の変遷 3-4-1 青森・弘前・八戸の繁栄 3-4-2 鉄道の拡張と連絡線の進展</p>	<p>⑥戦時下までの青森文化 3-6-1 文化の諸相 3-6-2 本州最北端の地域と文化発信 3-6-3 生活の変容と女性たち</p>
<p>②引き揚げと農林漁業 4-2-1 復員と引き揚げ 4-2-2 戦後開拓 4-2-3 農地改革 4-2-4 戦後の農林漁業</p> <p>③戦後改革と経済復興 4-3-1 戦後経済状況と改革 4-3-2 総合開発計画 4-3-3 八戸臨海工業地帯の建設 4-3-4 りんご産業の拡大</p>		<p>④解放と復興の中の教育問題 4-4-1 解放と復興 4-4-2 児童をめぐる食糧・健康問題 4-4-3 新制中学校の発足と諸問題 4-4-4 教師の食糧事情と週五日制の導入 4-4-5 新制の高等学校と大学 4-4-6 農村勤労青年と青年学級</p> <p>⑤吹き上がる戦後文化 4-5-1 敗戦後の世相 4-5-2 復活した大衆娯楽と行楽 4-5-3 連続する文化活動</p>
<p>②巨大開発と原子力の時代 5-2-1 開発行政の開始 5-2-2 むつ製鉄とフジ製糖の挫折 5-2-3 八戸新産業都市指定と公害問題 5-2-4 原子力船「むつ」とむつ小河原開発 5-2-5 稲作とりんご産業</p> <p>④成長を支える労働と産業 5-4-1 出稼ぎ 5-4-2 集団就職 5-4-3 主産地の形成 5-4-4 転換する林業と漁業</p>	<p>③都市計画と街並みの変化 5-3-1 市町村合併 5-3-2 郊外化の促進 5-3-3 自動車社会へ</p>	<p>⑤豊かな生活を求めて 5-5-1 北国のくらしと子どもたち 5-5-2 生活の現代化と県民生活 5-5-3 新しい生活をもたらしたもの 5-5-4 社会福祉と地域医療 5-5-5 高度経済成長期の教育</p> <p>⑥青森文化の発信 5-6-1 「生きる」伝統から開花した文化 5-6-2 森林活用の文化 5-6-3 あすなる国体</p>
<p>③グローバル時代における産業の変化 6-3-1 オイル・ショックからバブル崩壊へ 6-3-2 国際競争に直面する諸産業</p> <p>④自然の開発と災害 6-4-1 世界遺産白神山地 6-4-2 河川と港湾の整備 6-4-3 巨大災害</p>	<p>②首都圏とつながる青森経済 6-2-1 産業振興と道路整備 6-2-2 青函トンネルと東北新幹線 6-2-3 青森空港 6-2-4 企業誘致</p>	<p>⑤観光資源とふるさとづくり 6-5-1 観光資源 6-5-2 お国自慢 6-5-3 つくられる「ふるさと」</p>

表1 『青森県史』（通史編3 近現代 民俗）の章・節・項の構成（数字は、それぞれ、□～□ = 章、①～

	政治と行政	戦争と地域・人々	東北と青森
一 青森県 の 出 発	①明治新政と文明開化・自由民権 1-1-1 青森県の誕生 1-1-2 文明開化と発言する民衆 1-1-3 北の自由民権	③北奥社会の軍事体制 1-3-1 歩兵第五連隊の創設 1-3-2 日清戦争 1-3-3 第八師団と大湊水雷団 1-3-4 八甲田雪中行軍	1-2-2 *士族授産とりんご栽培 1-1-3 北の自由民権 1-4-3 *青森開港運動と対ロシア貿易
二 大 国 化 の 中 の 地 域 社 会	①地域と帝国の開幕 2-1-1 県会と県財政 2-1-2 帝国議会と民党運動 2-1-3 政党運動の展開 2-1-4 日清・日露戦争期の県政と市町村 2-1-5 護憲運動へ	②対外戦争と地域社会 2-2-1 日露戦争とその影響 2-2-2 軍馬と青森県 2-2-3 第一次世界大戦と軍縮の時代	2-1-2 帝国議会と民党運動 2-2-2 軍馬と青森県 2-3-1 「大正二年大凶作」 2-3-2 ヤマセと国有林とトラホーム 2-3-3 東北振興と青森県 2-5-1 りんご栽培の拡大 2-5-2 国有林開発と森林鉄道
三 恐 慌 か ら 戦 争 へ の 道	①大正デモクラシーから戦時体制へ 3-1-1 大正後期の政治と社会 3-1-2 普通選挙制度の成立 3-1-3 昭和初期の社会問題 3-1-4 戦時下の県政	⑤「北の要塞」の確立と崩壊 3-5-1 北方警備と大湊要塞部 3-5-2 「満州」の戦火 3-5-3 日中戦争 3-5-4 アジア・太平洋戦争 3-3-3 満州移民と青少年義勇軍 3-3-4 満州林業移民と営林実務実習生	3-6-2 本州最北端の地域と文化発信 3-2-3 りんご加工・あおり缶詰の発展 3-2-4 戦時経済統制（東北振興事業） 3-3-2 農村の窮乏と身売り 3-3-4 満州林業移民と営林実務実習生
四 改 革 と 復 興 の 日 々	①敗戦から新生青森県へ 4-1-1 戦後処理と民主化の胎動 4-1-2 朝鮮戦争と日本の独立 4-1-3 日米安保条約と自衛隊 4-1-4 敗戦後の政治状況	4-2-1 復員と引き揚げ 4-1-2 朝鮮戦争と日本の独立 4-1-3 日米安保条約と自衛隊	4-3-4 りんご産業の拡大
五 高 度 経 済 成 長 の 光 と 陰		①アメリカ軍基地と極東戦略 5-1-1 ベトナム戦争と三沢基地 5-1-2 ベトナム戦争以後 5-1-3 日米ガイドラインと日米同盟	5-2-2 むつ製鉄とフジ製糖の挫折 5-2-4 原子力船「むつ」とむつ小河原開発 5-2-5 稲作とりんご産業
六 現 代 か ら 未 来 へ	①継続する保守県政 6-1-1 開発行政の継続 6-1-2 開発行政から文化行政への転換 6-1-3 政治改革の兆しと模索 ⑥未来の青森県像を描く 6-6-1 青森県長期計画の変遷 6-6-2 青森県総合計画への県民参加 6-6-3 未来の青森県を創る		6-4-3 巨大災害 ⑥未来の青森県像を描く 6-6-1 青森県長期計画の変遷 6-6-2 青森県総合計画への県民参加 6-6-3 未来の青森県を創る

していること（四二四ページ）、「新産都市公害のデパート八戸」を立項していること、政府の原子力政策と青森県地域の関係を、原子力船「むつ」の事故・洋上漂流から廃船に至る経過や、六ヶ所村への核燃料サイクル施設建設とトラブル続発による操業延期と管理体制の転換について具体的・系統的に叙述していることなどは、東日本大震災と福島原発事故以降の現代日本の問題を私たちの問題として考える上で重要である。その際、むつ小川原総合開発の展開と地域の受け入れに至る経過と要因を、集落形成の歴史の異なる三層構造をもつ六ヶ所村の地域構造の分析を提示した上で、その中の戦後の開拓集落の住民が、凶作の連続で生活の見通しを失ったことなどから土地を売却したことが開発用地買収の進展の要因になっていること、しかし、就業先として期待した工場の進出が進まなかったことなど（四三八～四三九ページ）、開発行政とその展開・問題を歴史的に分析する際に必要な地域分析の視点と方法を示していることが注目される。

二、戦争と青森県の地域・人々

【表1】から見て取れるように、「戦争と地域・人々」に関する節・項を各章ごとに配置し、それによって戦争と平和、軍隊と地域の歴史を、近現代史の諸段階のそれぞれについて事実の具体的提示を基礎に叙述していることは、本巻の特徴の一つである。それがまた、青森県の「歴史を北方世界のなかに積極的に位置づけ」る試みでもあることは、第一章第三節の「北奥社会の軍事体制」、第三章第五節の『北の要塞』の確立

と崩壊」という節立てが示している。

県民の生活に直接関わり、政治的にも鋭い対立軸である三沢基地について、青森県・青森県民の問題として事実の丁寧な記述に努めていること、「日米共同演習と機動演習」（四一一ページ以下）を立項して、地域と日本の平和が国際政治と世界の平和に密接に連動していることを丁寧で具体的な記述によって示していることなどは、立場の異なる県民に共通の議論の基盤を提供するものとして、基地をもつ青森県の県史としての見識を示すものと思う。

上述の「北方世界のなか」での位置づけという編集方針は、大陸との国際的関係の叙述の中でも具体化されている。第三章第三節「移動する人々」は、人の移動に視点を据えて節立てしたものである。ここでは、人口の自然増加率の高さが過剰人口を生み、人々の移動を結果すると指摘した上で、出稼ぎが男子の北方漁業（ニシン）に集中していることを示し、その対極に、紡績等の就業先が県内に乏しいという産業構造が女子の出稼ぎ機会を欠く要因となり、その結果として一九三一年の冷害後に、都市部と冷害地を中心に女性の「身売り」が行われるという事態を招いたことが示される。また、寒冷な林業地帯であるということが、満州林業移民を送出する条件になったこととともに、満州国の若手官吏を営林実務实习生として受け入れる条件でもあったことが示されている。

こうした戦前・戦時期に「移動する人々」の戦後の帰結と展開は、第四章第二節「引き揚げと農林漁業」、第五章第四節「成長を支える労働と産業」で叙述されているが、出稼ぎの村で中学生が「イカ釣り子」として出漁していたことをめぐる記述は（四八〇ページ）、青森県の漁村

地域の抱えていた現実を鋭く示している。

以上の外にも、本巻には、現代の日本社会が抱える問題と切り結んで展開する歴史学研究的新しい動向、課題設定に即した叙述が随所に見られる。第五章第五節「豊かな生活を求めて」の第四項「社会福祉と地域医療」は、そのような近年の研究分野とその成果の反映である。

三、本巻への要望

第一に、「民俗総論」に索引があるが、「通史編」には索引がないため、六〇〇ページを超える大冊の内容を系統的に把握するのに困難がある。例えば、大湊の軍事的性格の変遷を通して見たいと考えた場合、本巻は、一九〇二年の横須賀鎮守府大湊水雷団開団に始まり（四三ページ）、一九〇五年の大湊要港部（一一四ページ）、一九二三年の鎮守府並の機能付加（一二五ページ）、一九三三年の大湊海軍航空隊開隊と大湊飛行場開設（二七〇ページ）、一九四一年の大湊警備府への改編（二八〇ページ）、敗戦後の大湊地方復員局掃海部としての存置と一九四六年の廃止（三二二ページ）、一九五三年の大湊地方総監部設置（三二三ページ）と翌年の海上自衛隊大湊地方隊（三二六ページ）と各所に記述され、一九六八年の原子力船「むつ」定係港の記述に至るが、これを本巻の叙述から確実に拾い出すことはなかなか困難である。事項・地名・人名索引があれば、関係記述の追跡に便利で、我が町の歴史を知りたいと思う県民の利用や、学校の地域学習・地域研究での活用にも便利であることを思えば、索引を欠いていることは不親切と言わざるを得ないだろう。今後、「近

現代資料編」八巻と本巻を通した索引が作成されることを期待している。

第二に、県史の主題の中で、当該県知事の施政や任用・人物の叙述は重要である。本巻では、第三章第一節で「大正期の青森県は知事の任期が短」いことを指摘しているが（二〇二ページ）、その要因に関する記述はない。一八八六年七月から一九四七年三月までに任用された知事のべ人数は、全国平均三四・〇人に対して東北六県平均で三四・三人、県別では、秋田県四〇人、福島県三八人、宮城県三六人、山形県三一人、岩手県三三人に対して青森県は三八人であった。また、その時期を一九一七年一月の川村知事着任から一九三二年一月の宮本知事離任までの一五年六か月に限れば、青森県の知事は一六人で、一知事の平均在任期間が僅かに一年未満である。これを、同期間の秋田県・山形県・福島県が一一人、岩手県が一〇人、宮城県が七人であることに比べると、青森県政治上上の固有の事情が存在することは確実であろう。県知事は政府の地方統轄の要であり、与党に有利な選挙指揮を警察機構を動員して行う責任者であるため、とくに政党政治期には、内閣の交代ごとに知事は大幅に入れ替えられた。しかし、青森県の交替数の尋常でない多さは、青森県の近代史上の問題として解明していただきたい主題である。

おわりに―読後の感想

本巻通史編を通読してもった率直な感想と疑問は、政府が青森県域に投下し、青森県が「後進性」打破のために受け入れた莫大な「地域開発投資」が、挫折した「むつ製鉄」「フジ製糖」や原子力船「むつ」、六ヶ

所村の核燃料サイクル施設などに投下されたこと、それに比べてりんごに代表される地域農業や林業・漁業、地場の商工業、県民の教育と文化・芸術活動、地域医療・地域福祉の自律的發展のためには十分には投下されてこなかったのではないかとということである。

現代の日本と世界の問題を地球規模で考えるとき、経済成長一辺倒では地球環境自体がもたないことは自明のことと思われる。そのように考えるとき、白神山地や十和田湖に代表される豊かな自然環境、りんごに代表される地域産業の記述にとどまらず、全国に知られる「駄菓子」はヤマセ常襲地帯での凶作時の代用食として作られたものだという記述は(二二二ページ)、青森地域の(広く東北六県の)地域とそこで働き暮らす人々の生活こそが、かけがえのないものとして大切にしなければならぬことを、歴史の事実として示していると思える。

本巻通史編の最後が『青森県史資料編近現代7 青森論』の写真とその記述で結ばれ、その後には「民俗総論」とDVDが配されていることは、『青森県史』近現代編のみならず、『青森県史』全三三巻の結びとしての確だと思つた次第である。

参考文献

阿部恒久『裏日本』はいかにつくられたか』日本経済評論社、一九九七年

竹永三男「地方長官会議・東北振興調査会と東北六県」『部落問題研究』

第二二五輯、二〇一八年

内藤正中『島根県の百年』山川出版社、一九八二年

(菊判、八四七頁〔「民俗総論」付録DVD付き〕、青森県、平成三十年(二〇一八)三月十五日刊行、本体価格三五〇〇円+税)

(たけなが・みつお 島根大学名誉教授)